

読売新聞東京版の「ホームルーム」というコラムで絵本作家の仁科幸子さんがゆめやのブッククラブに触れていただきました。以下記事抜粋

「世の中は何でもスマホで、人と人が顔を合わせなくても、仕事も買い物も成立してしまう時代になりました。しかし、「いやいや、新聞がなければ始まらない！」と、そんな人々もたくさんいます。

先日、甲府の絵本専門店ゆめやが開店 44 年を迎えました。店主の長谷川さんは「ここまでやってこられたのは、むやみに規模を大きくせず、お客様とのつながりを大事にしてきたから」とおっしゃいます。先に商品を渡し、後払い、手書きの便りによる交流。こうした手間のかかる、一見無駄とも思えることを丁寧にやっていく。まさに人間同士の信頼やつながりが一番の強みになっているのです。……」

読売新聞・東京 4月18日 2024 コラム全文



絵本作家 仁科幸子



世の中は何でもスマホで、人と人が顔を合わせなくても、仕事も買い物も成立してしまう時代になりました。しかし、「いやいや、新聞がなければ始まらない！」と、そんな人々もたくさんいます。

先日、甲府の絵本専門店ゆめやが開店44年を迎えられました。店主の長谷川さんは「ここまでやってこられたのは、むや

## 活字に触れ 読解力育む

みに規模を大きくせず、お客様とのつながりを大事にしてきたから」とおっしゃいます。

先に商品を渡し後払い、手書きの便りによる交流……。こうした手間のかかる、一見無駄とも思えることを丁寧にやっていく。まさに人間同士の信頼やつながりが一番の強みになっているのです。

今、出版界で一番問題になっているのは、小学3年生くらいの子どもが一気に本を読めなくなったことだといえます。勉強ができないわけではなく、物語の本当の意味が読み取れないのです。昔の児童書には道徳や哲学があり、そんな本を読む中で、いつの間にか子どもたちは道徳的な心を育てていたのかもしれない。

この冬、大雪が降った朝にも新聞が届いていて、新聞配達

の仕事は本当にご苦労だと思いましたが、子どもの頃に本を読めない、大人になって新聞を読もうとは思わないでしょう。

すると、そんな中、新鮮なアイデアで頑張っている新聞店があることを知りました。「新しい新聞配達店づくり」として、「活字・紙媒体の良さを体感してもらうため」「思いや考えを言語化する手伝い」この趣旨で、絵本やビジネス本をレンタルしているのです。こうした丁寧な企画が、新聞を身近に感じさせ、読める人を育てていく気もします。

5月の連休に「仁科幸子の絵本の世界」原画展とおはなし会」と題して、県立図書館でトークイベントを開きます。どうぞ、絵本の活字の世界にも触れてみてください。